

11月27日 恥

「奥ゆかしい」という言葉があるが、「ゆかし」という古語はもともと「行かし」で「そこに行きたい、知りたい」という意味。「奥まで見に行きたい、知りたいような状況」を示すことから、「慎み深く上品で心惹かれる」という意味を持つようになった。

日本文化は「恥の文化」だと言われてきた。自分の恥を知り、慎みやかに暮らすことを良しとする考え方が日本に定着していたからだ。先ほどの「奥ゆかしい」もそうだが、「謙虚」を重んじる日本の考え方にも通じるものがある。

「恥」とはもともと外部からの圧力によって生じる感情だが、それを自覚して初めて概念として身にしみる感情でもある。だから、「恥ずかしいからやめなさい」とたしなめられると、すぐに自己を省みることができた。一方、「恥」にはマイナスの働きもあり、「恥ずかしいから自分の考えを言わない」のように、人を消極的にもさせる。日本人はこうした「恥」の特徴を踏まえた上で、相手を思いやるコミュニケーションを得意としてきた。「空気を読む」というのはまさにこのことである。

しかし、グローバル化が進む中、とりわけバブル期には、違う「空気」をまとう外国人とのコミュニケーションでうまく行かない場面が頻出した。外国人の目には、自分の意志を明確に示さない日本人は、あてにならない隣人、もしくは思い通りに交渉を進められる「カモ」に見えたのだ。

『NOと言え日本』がベストセラーになったのもこの頃だ。

これは私の肌感覚だが、その頃を境に日本人の「恥」感覚が変わってきたように思う。通勤電車内での化粧、電話、騒ぐ子どもたちへの親のしかり方まで。「ほら、隣のおじさんがにらんでるよ」。

自制ではなく外圧。欧米のように法律でがんじがらめにされる世の中を望んでいるのだろうか。

